8月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　素材生産協同組合　8月6日

梅雨らしい梅雨も無く早々に猛烈な暑さが続いている。 毎年夏の間に1回くらいは軽い熱中症ぎみになる。 この洗礼を過ぎるとようやく暑熱順化が整い夏を乗り切ってきた。
若い頃は前橋共販所にはエアコンなどと言うものは無く、夏に移行するのに同調して順応してきた。
しかしこの数年はとても順応が間に合わない年が続いている。
ここ数年は「今年は昨年とは違う暑さだぞ。」と思う事が連続していて、今年は遂に限界を感じるようになった。　毎年憎らしいほど繁植が旺盛な外来種の雑草の葉が、今年は何と焼けてチリチリになっている。空梅雨という事もあって、葉を冷やすだけの水が供給されないという事だろう。
木材の虫害も、例年に比べてかなり少ないようには見える。
土場に並んでいる公売物件を見ても、ほとんど見受けられない。
しかし　産み付けられている虫の卵は昨年同様に存在する。「今年は暑いから孵化するのは来年にしよう。」 とか「秋になって涼しくなったら出てゆこう。」 とは行かない訳で、何とか成虫になって来年の分の卵を産み付けなければならない使命がある。 自然は必ず帳尻を合わせに来る。
しかし　私は昨年　セミが羽化し始めたところでカチカチに干からびているのを目にした。
虫害を起こす虫はほとんど甲虫類であるが、今日素生協の市場で目にしたのはミドリカミキリと思われる成虫が干からびていた。 ここの市場は広葉樹が多く、従って見られるカミキリムシの種類も多い。　直射日光に照らされる椪の表面には虫害痕はあまり見られないが落札されて引取が始まった椪は、崩されているので虫害痕が凄い。
見えている穴は、成虫になったカミキリムシの脱出孔なのだが、椪積みされた椪の中の方で盛んに羽化が起こっている様だ。木の中で蛹になるのが遅ければ椪積みされた後で、温度の低い方へ　移動して蛹になり、羽化したのか？　それとも椪積みの表面にいた幼虫は高温で羽化する事が出来なかったのか？　いずれにしても買い方たちは工場に持ち帰ると、やはり虫害は例年のごとく凄いと言っている。
そんな中で、今日の市はスギの4.0mの大丸太が172㎥も出品されていた。ただ単に太いだけの物から、内容のよさそうな物まで色々であったが、地元の森林組合からの出品だという。
全部で21本出ていたが、売れたのは9本だけだった。 買い方の中からは
「どうしてこんな 良い木を こんな時季に 伐っちゃうかねぇ。切り口も曲がっているし4.0mあるのか？」
「森林組合だもの仕方ねえよ。 森林組合は出荷するまでが仕事だから。」
と言う声が聞こえた。 太い木の鋸断はそれなりの技術が必要だが、その事も含めて、伐採・造材には“この木はどう使われるのか？”　”何に使われるのか？”を知った上で造材しなければ100年掛かって育った木が、2束3文になってしまう。

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　8月20日

恐ろしい程の暑さも立秋を境にやっと解け、昔ながらの夕涼みができる夏になった。
しかし　このまま暦通りに温度が下がる筈もなく、昨日くらいは既に元の猛暑にもだった。
今日　前橋の市場から戻る途中で、車の外気温表示がとうとう　44℃　を示した。
前橋市から旧群馬町に入る辺りは通勤していた頃も、最も温度の高い場所がある。
もちろん公式発表の温度では無いが、少なくともその辺りのアスファルトの路上では
その温度なのだ。そしてそこで生活している人も居るし、ましてやその路上を仕事の場にしている
人たちもいる。　暑い暑いと言って熱中症予防を理由に空調に管理された場所に身を置く
者としては頭の下がる思いである。

今日の市はさすがに土場に出てみても、悠長に丸太の品定めをする人は無く　サッと見てきて
後はエアコンの効いた室内で、入札するのが普通である。
今日は外に出るのが嫌な人たちが集まって、鋸の話をしていた。
入札物件を見渡しても、とくに新しい物は無く土場の炎天下でカリカリに干からびた丸太が
少しばかり市に掛かっている状態だ。　サッと見てくれば用が足りる程度の量である。
特に欲しい物はないのであろう。

鋸の話題は主に挽き曲がりについて、鋸の目立てが悪いと言う話である。
群馬県内では製材用の鋸を研磨する業者が減り、数少ない業者への負担が増えすぎて
目立てが粗雑になっているというのである。
製材用の帯鋸の刃と言う物は、刃先にステライトと言う硬い鋼のチップが付いている。
これの幅が約2mm程であろうか。この先端が鋸に対して直角に出来ていないと挽き曲がり
が起こる。チェーンソウの刃も左右の目立てが偏ると、真っ直ぐに切れないのと同じである。
群馬県の製材業者が長野県の佐久市の業者に目立てをどうしているのか聞いてみた
長野県の製材業者は、群馬県の製材業者と違ってカラマツやモミなどと言った扱いにくい丸太を
挽いている。　彼らに言わせると「失礼だがスギなんて豆腐を挽く様なもんだ。曲がらない」
との事だったそうだ。　聞けば長野県は製材業者が減る一方で目立て業者の仕事に余裕が
出来、その結果顧客を確保するために、競争で目立ての質を上げている。という事らしい。
.帯鋸の刃は、真っ直ぐの様に見えて、あれで結構左右にぶれながら挽いている。
鋸が丸太と出会う辺りに”セリ”と呼ばれる装置が有り、これが鋸の捻じれを押さえている。
しかし　太い丸太や硬い丸太を挽くときは,どうしてもねじれが出る。　この幅が2～5mmに達する
場合もあり、製品としては成り立たない。この為少し大きめに挽いて何度も挽き直す。

こんな話の発端は今市場に並んでいる木をどう挽くか？　から始まっている。

丸太はなま物であり、それを挽いて乾燥して始めて製品になる。　今日の丸太は、なま物どころか
ミイラの様だと言っている。　**硬い丸太**だ。　実際に現物は皮の無い部分は胴割れを起こしている。
これは木口の割れとは訳が違う。　割れの長さは表から一見して判るし、これが芯まで届いている。
製材品の乾燥は、先ずは蒸す事で内圧を増し木材の細胞間の通気を良くする。そののちに時間を
かけてゆっくりと湿度を下げてゆく。　生の皮剥け丸太を炎天下で炙れば芯の水分は抜けないから
表面だけが急激に収縮する。　ひとたまりも無いわけだ。
これでは初めから割れた製品を作るようなものだ。　更にこの割れに鋸の刃が入り込むと、鋸刃は
割れの方向に連れてゆかれてしまう。　挽き曲がりだけでなく、強いテンションが掛かっている鋸刃に
更に強い歪みが生じ、最悪の場合は鋸の破断につながる事もある。（実は私も経験があり怖い思いをした）
今日　市に掛かっている丸太は、かなりの時間この炎天下の山土場で炙られ続けた丸太であろう。
買い方が二の足を踏むのもうなづける。
3.0mの柱材に至っては、元々値下がり傾向だったところなので、10,000円/㎥を割り込んでいる。
柱丸太の胴割れは逃げ場が無く、どうやっても柱にはならない。
この陽気の中で、山土場に置いておける時間は限りなく短くなっているのである。
今の時季に丸太を売ろうとすれば、この先どのように使われるのかを考えて、ミイラになる前に
売り切る必要がある。